

東栄町の淵の名前

豊橋市自然史博物館 松岡敬二

名古屋地学会第 301 回例会では、東栄町の大干瀬川（振草川）沿いの「預り淵」「煮え淵」「鳶の淵」を見学した。その際に、参加者から淵の名前についての質問を受けたが、その場では回答できなかったため調べた内容を報告する。

これらの淵の名前は、『愛知県文化財目録』（愛知県教育委員会, 1999）や地元の観光案内で使われている。

「預り淵」は東栄町西園目にあり、大干瀬川が断層により河道が屈曲し、数段の滝（預り滝）となり、淵に流れ込んでいる（写真 1）。滝部分にはポットホール（甌穴）が形成されている。直線的に伸びる淵の方向は、断層の走向方向に一致している。「預り淵の名前は、『愛知県伝説集』の中「材木をこの滝を通す時は必ずこの神様に、お神酒をささげお許しをいただかねばならない。ある時に横着な村人がこのお祭りをせず材木を滝から流したら淵へ入った材木はたち沈んでしまって、とうとう一本も浮き上がってこなかった。すっかり恐れて、翌日、お酒を供えておわびをしたら、材木は浮きあがってきたが、みな黒焦げになっていた（福田, 1967）とあることに由来するようである。『東栄町誌』の川の地名には、アズカリブチとある（東栄町誌編集委員会編集, 2007）。

「煮え淵」（写真 2）は、戦前に東栄町にあった本郷菊屋商店が発行した絵葉書『北設本郷風景』には、「ネーエ淵」（写真 3）の名前となっている。『東栄町誌』の川の地名には、ネーブチ（ニエブチ）とある（東栄町誌編集委員会編集, 2007）。滝頭から発達段階の異なるポットホールが複数並んでいる。大きなポットホールは、風呂釜のような形状のものもある（写真 4）。この大型のポットホール内は、「滝の水が落ち込んだ水の泡の様子が、煮えたぎる釜から沸き上がる湯玉のようである」と見えることから、ネーエ淵、ネーブチ、そしてニエブチとなったと考えられている（金田新也氏, 私信）。

納富（1924）の第四版第二図には、岩脈を飛瀑する写真があり、「大瀧」の名前が記されている。淵名の記述はない。戦前に本郷菊屋商店が発行した絵葉書『北設本郷風景』には、現在の使われている「鳶の淵」ではなく、「下ノ淵」とある（写真 5）。地元のお年寄りには、「鳶の淵」を「したのふち」、滝



写真 1 預り淵



写真 2 煮え淵

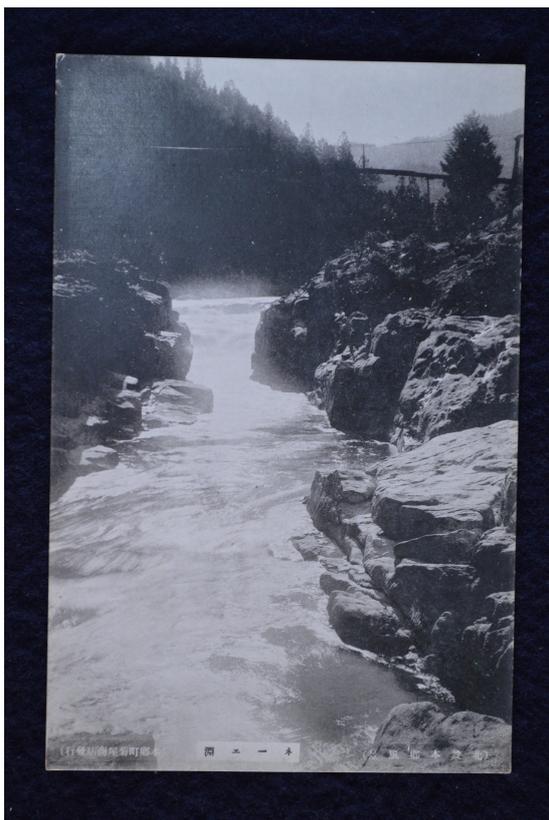


写真3 ネーエブチ (本郷菊屋商店)



写真4 煮え淵の風呂釜型のポットホール

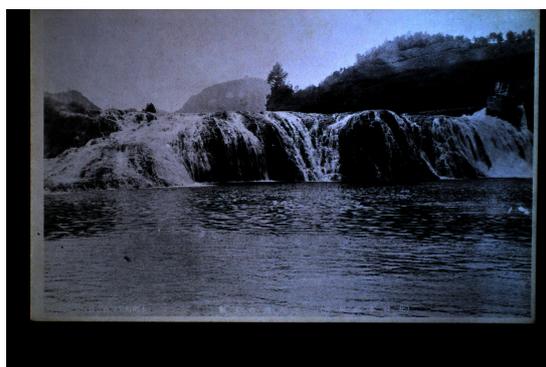


写真5 下ノ淵 (本郷菊屋商店)

頭の上のものを「うえのふち」と呼んでおり、この「シタ」が「ツタ」になり、「蔦」の漢字をあてたと考えられている(金田新也氏, 私信)。

最後に、地名情報について提供して頂いた東栄町教育委員会の金田新也氏、本郷菊屋商店発行の絵葉書を見せて頂いた豊川市の佐溝力氏にお礼申し上げます。

引用文献

愛知県教育委員会, 1999 愛知県の文化財目録. 国, 県及び市町村指定文化財. 愛知県. 255p.

福田祥男, 1967 愛知県伝説集. 泰文堂, 名古屋. 229p.

納富重雄, 1924 設楽地質説明書. 地質調査所, 東京. 49p.

東栄町誌編集委員会編集, 2007 東栄町誌 (自然・民俗・通史編). 東栄町. 1462p.